

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2022 年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	特別支援学校音楽科における「即興表現」のための教材開発：音楽に付随するエンカレッジな機能に着目して
研究代表者	上野 智子（和歌山大学 教育学部 准教授）
共同研究者	菅 道子（和歌山大学 教育学部 教授） 山崎 由可里（和歌山大学 教育学部 教授） 沼田 里衣（大阪公立大学 文学研究科 准教授）

研究成果

1. 本研究の目的(問題の所在にみる本研究の特色および重要性)

本研究は、大学教員、特別支援学校教員、コミュニティ音楽団体が協働して特別支援学校音楽科における「即興表現」の教材開発を行うことを目的とする。2021 年度実施した A 特別支援学校教員(約 10 名)への調査によれば、音楽科授業において、最も苦手とする音楽活動は「即興表現」であった。「即興表現」に取り組むあたり、現場の教員から出された要望は、①音楽を用いて他者とのようなやりとりができるのか、②楽器は何を選び、どのように演奏するのか、③身体表現を用いるのであればどのような工夫ができるのか、の 3 点であった。これらの要望は、「即興表現」にかかわる知識や技能の習得だけでなく、「即興表現」の中で生まれた音や音楽が児童・生徒の諸能力や諸感覚にどのように働きかけるのか(音楽に付随するエンカレッジ機能)について学び・体験したいというものであった。これを受け、2022 年 3 月には和歌山大学教員(上野、菅、山崎)と、大阪公立大学教員(沼田)及び阪神間で活動するコミュニティ音楽団体「おとあそび工房」のメンバー 8 名で、教員研修向けのワークショップ動画を撮影した。

2022 年度は、(1)上記研修動画による A 特別支援学校教員を対象にした遠隔と対面のハイブリッド型の教員研修、および(2)研修を受けた教員による「即興表現」を取り入れた授業を実施した。その際、教員が①「即興表現」への苦手意識を軽減すること、②「即興表現」を用いることで、音楽に付随するエンカレッジな機能を活用することを目指した。

2. 研究の計画と経過

本研究では、前述した目的を達成するために、(1)A 特別支援学校教員を対象にした「即興表現」を取り入れた音楽科授業づくりのための教員研修、および(2)教員研修受講者による「即興表現」を取り入れた音楽科の授業づくりへの助言・支援を行った。加えて、(3)2017 年度から継続している本共同研究について、学会発表を行った。

(1)については、2つの研修の機会を設けた。1つ目は、和歌山大学教育学部(教職大学院)が行っている「ブレンディッド・ラーニング教員研修履修証明プログラム」第 2 期の講座「あなたもできる！特別支援学校・学級における音楽科授業力UP講座－子どもの自由な表現を引き出す音楽活動－」(オンデマンドと対面、全 5 回:受講者 10 名)、2つ目は、A 特別支援学校での教員研修「動いて・鳴らして・おもしろい音楽づくり」(対面、1 回:8 名)である。ブレンディッド・ラーニングのオンデマンド講義(全 3 回)は、昨年度に撮影した教員研修動画を用いながら即興表現活動の解説や楽器の紹介等の内容を追加して制作・配信した。また、A 特別支援学校での教員研修では、沼田と「音あそび工房」メンバーや保護者も参加し、モノや情景、感情をテーマに音や動きによる即興表現や、自由即興によるアンサンブルなどの体験を取り入れた。

(2)については、(1)の 2つの教員研修を受講した A 特別支援学校 B 教員が主担当となり、小学部 3 年生 11 名の音楽科授業の中で即興表現の活動を実践した。本授業は、節分にちなんだストーリーの中に、楽器や身体表現など様々な即興表現の活動を複数取り入れる形で構成されたものであった。児童たちは、目的や意図をもって楽器を自由に鳴らし、音楽に合わせて身体で即興的に表現するなど、楽しみながら学習に参加していた。

(3)については、日本音楽教育学会第 53 回大会にて、ラウンドテーブルにおいて「コミュニティ音楽と学校音楽の連携から即興音楽表現を考える－音楽する場の自由と枠組みをめぐって－」と題し、本年度の取り組みに至る研究成

果を報告し、学校における即興音楽表現の可能性について意見交流を行った。

3. 研究の成果と今後の課題

本研究の成果としては、次の3点が明らかになった。第1に、具体的なテーマやストーリーなど枠組みのある即興表現は、即興に苦手意識や戸惑いのある人にとっては、取り組みやすい活動になるとともに、音楽科の学習活動としても取り入れやすいことである。A 特別支援学校での教員研修の受講後に実施したアンケートでは、テーマをイメージして音を出したり身体で表現したりすることの面白さに関する記述が多く見られたことから、自由即興よりも緊張せずに活動に参加できたようであった。また、即興表現を取り入れた音楽科の授業を実践したB教員も、児童たちが即興表現の活動に参加するための動機として、授業づくりの際にはストーリーやテーマの設定を重視していた。これは、設定された時間の中、学習のねらいを明確にした上で学習活動の展開をデザインする音楽科の授業づくりにおいて、「即興表現」活動を抵抗なく導入する際のポイントになると考えられる。

第2に即興表現に苦手意識や戸惑いのある人が抵抗なく参加するためには、あらゆる表現が受け入れられ安心して表現できる場の設定が必須条件となるが必要になることである。前述のA特別支援学校での教員研修でのアンケートでは、冬の風景を即興表現する活動について、「自由に表現の全てを肯定できる場が生まれていることに感動しました」といった、気兼ねなく即興表現ができる場の成立条件に気付く記述や、「自分1人で音色を楽しむだけでなく、他の人の音を聞いて音の重なりも心地よかった」など、自身が発する音に意識を向けるだけでなく、他者との音を通じた交流の楽しさに気付く記述を確認できた。またB教員による特別支援学校での授業実践においても、児童たちの表現に対する言葉かけなどその子なりの表現を認め合う雰囲気をつくる中で、児童たちはそれぞれの感じ方や表現の仕方が尊重される形で、諸感覚を働かせながら活動に参加していた。

第3に、教員等にとっての即興表現への覚醒や養成には、座学と演習の交互に継続的な設定(理論と実践の往還の具体化)が必要なことである。楽器の紹介や音や音楽が諸感覚に働きかける機能などについて解説、実際の即興表現活動の紹介といった座学(オンデマンド)の内容は、実際に即興表現を体験するという演習(対面)を通してより理解を深めるものとなっていた。オンデマンド講義について、アンケートの回答者全員が「興味関心をもって学習できた」にチェックをつけていたほか、自由記述からは、参考文献を取り寄せて、さらに学びを深めようとした受講者もいた。しかし、こうした知識や情報は、実際に体験することで実感を伴うものになるようであり、A特別支援学校での研修やブレンディッド・ラーニングの対面演習においても、実体験の重要性がアンケートや研修後のフリートークからも確認できた。

今後の課題としては、テーマなど何らかの枠組みを設けない即興表現に焦点をあてた教員研修や授業づくりについて引き続き検討することが挙げられる。研修後のフリートークでは、慣れていないこともあってか、こうした形の即興表現に難しさを感じる感想がみられた。一方で、研修後のアンケートには、そうした難しさを感じながらも、「自分の固定観念の固さに気づきました」「経験を重ねることで少しずつ即興演奏に慣れていきたい」など、自身の即興表現についての気づきや継続的な体験を求める意見を確認できた。枠組みを設けない即興表現の面白さや自由さは、音楽をする当事者自身が「今・ここ」で生まれる音楽(文化)の担い手であることを強く感じられることにある。このことは、学校教育においてより柔軟で多様な音楽経験をもたらす可能性を有しており、引き続き研究を進めていきたい。